

論文の内容の要旨

論文題目：化学物質過敏症とストレス性要因

との関わりの解明

指導教官：久保木富房教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 10 年 4 月 入学

医学博士課程

内科学・ストレス防御心身医学専攻

氏名：辻内 優子

【緒言】

化学物質過敏症（MCS）は 1987 年に Cullen が提唱した概念で、少量化学物質の持続暴露か一度に大量暴露を受けた後に引き起こされる多症状の疾患である。MCS の概念は一般的に認識されておらず、疾患名も含めて現在も多くの議論がある。本研究では、心身医学的観点から MCS とストレス関連因子との関わりについて明らかにすることを目的とする。

【被験者】

MCS におけるストレス関連因子を調べるために、27 名の MCS 患者（男性 9 名、女性 18 名）と 36 名のコントロール群（男性 7 名、女性 29 名）について調査した。患者群は北里研究所病院臨床環境医学センターにて MCS と診断されたものである。コントロール群は家庭向け雑誌に広告を掲載して募集した。その条件として、20 歳から 70 歳までの健康な男女、服薬していない、シックハウス症候群と診断されていない、過去 3 年以内に新築住居に転居したか住居の改築

を行ったものとした。この条件によって、コントロール群は少量化学物質の持続暴露を受けているにもかかわらず化学物質過敏症を発症していないものであると考えた。

【検査方法】

全ての被験者に対して、ライフイベント、日常の苛立ち事、ソーシャルサポート、ストレスコーピング、嗜好、身体および心理症状、行動変化を調査するための生活健康調査表 (LHQ) を施行した。CMI 健康調査表 (身体的・精神的自覚症状)、POMS、アイゼンク人格質問紙、TAS-20R、身体感覚増幅尺度 (SSAS)、TAC24 (コーピングスケール) の心理テストも全員に対して評価した。自律神経機能として心拍変動を測定した。精神疾患の合併を評価するために、同一の心療内科医が全員に対して精神疾患簡易構造化面接 (M.I.N.I.) および精神疾患構造化面接 (SCID) から身体表現性障害の項目を抜粋して面接を行った。

【結果】

発症に先立つ心理社会的ストレス、発症および経過に関わる特徴的な人格傾向やストレス対処スタイルなどのストレス性要因には両群間で有意差を認めなかった。著明な差を認めたのは過去 1 ヶ月間の喫煙および飲酒の量であり、患者群では一人も喫煙したものはなかった。MCS 発症後、患者は多くの身体症状および心理症状を自覚していた。精神疾患の診断率はコントロール群で 11% であるのに対し、患者群で 89% であった。患者群での精神疾患合併の内訳は、身体表現性障害(63%)、不安障害(48%)、気分障害(40%)などとなっている。自律神経機能としての心拍変動は両群間で差はなかった。女性患者群を化学物質暴露と MCS 発症との因果関係が不明確な群と明確な群の二つのサブグループに分けて女性コントロール群との 3 群比較を行ったところ、因果関係が不明確な群は身体症状および精神症状を共に多く自覚しており、精神疾患の合併も多かったのに対し、因果関係が明確な群では身体症状を多く自覚しているものの精神症状の自覚は少なく、精神疾患の合併も多くなかった。

【結論】

MCS は、その発症には心理社会的ストレスよりも身体的ストレスが強く関与しているものと考えられ、発症後には多くの身体症状と精神症状の両方を呈し、精神疾患を多く合併する疾患であると考えられた。一方、喫煙量および飲酒量が少ないという特徴以外には、MCS 患者に特徴的な人格傾向や行動特性は認められなかった。また、化学物質の暴露と発症との因果関係の有無によって分けられる二つのサブグループの存在が示唆された。

ストレス反応としての病態理解

